

30-1053 W108-1

北海道薬科大学における実務実習プレトレーニングの評価

○早川 達¹, 黒澤 菜穂子¹, 郡 修徳¹, 野村 憲和¹, 早瀬 幸俊¹, 星 勝治¹, 江川 祥子¹, 島森 美光¹, 早勢 伸正¹, 岡崎 光洋¹, 村上 美穂¹ (¹北海道薬大)

【目的】北海道薬科大学では、平成 5 年に掲げた薬剤師養成教育に基づき臨床薬学教育を実施してきたが、平成 15 年には薬局実習の単位化や PBL (Problem Based Learning) を指向した実習への大幅な変更などカリキュラムを再編成し、教員組織も講座制から学科目制に変更するなど大学改革を実施した。なかでも、新実習カリキュラムのうち、6 週間の実務実習 (病院実習 4 週間+薬局実習 2 週間) のプレトレーニングとして実施される臨床薬学実習は、討論・発表やロールプレイを数多く取り入れ、全 54 日間に亘り 8 項目 (薬物治療解析、輸液、臨床心理、DI、TDM、保険薬局業務、一般用医薬品販売業務、調剤) の内容を少人数でローテーションし、4 年間の実習の総仕上げとして重要な位置づけとなるものである。本実習の成果について報告する。

【方法】本学 4 年生を対象として、臨床薬学実習終了時に、臨床薬学実習に対する評価と学生の臨床薬学実習開始前および終了時における能力の自己評価を実施した。臨床薬学実習に対する評価項目は、実習内容レベル、実習内容の量、総合評価 (5 段階) とした。学生の能力の自己評価は、各実習項目に示す目標に対して 5 段階とした。

【結果・考察】臨床薬学実習への総合評価は、平均 4.0 点 (5 点満点) と良好であった。各実習項目とも、学生の自己評価による能力は有意な向上が見られた。実習前の自己評価能力は、臨床心理が高く、輸液が低い傾向が見られた。実習後に高い伸びを見せたのは、輸液、薬物治療解析、保険薬局業務であった。本評価の実施により、学生の意識と能力が具体的に示され、講義も含めたカリキュラム全体としての課題も明らかとなった。